
旅

水夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 旅

【コード】

N5036B

【作者名】

水夢

【あらすじ】

旅にあこがれる少年リイト（自称）平和を愛するパチが旅にでる物語。

プロローグ

旅という物に憧れる。

いろんな町を、国を、物を、人を見ることが出来るから。

違う世界を見ることもできるかも知れない。

だから僕は、旅に憧れる。

旅を、してみたい。

旅をするとはどんなことか考える度に旅をしてみたい思いはふくらんでいった。

「リイ！」

僕の友達が、僕の名前を呼ぶ。

「パチ。お母さんとお別れはどうだった？」

僕は友達の名前を呼ぶ。

今日、僕は旅に出る。パチと一緒に。

パチのお母さんがこの話を持ちかけてきた。パチのお母さんはお土産を期待しているようだ。

「リイ…何で旅をすることになったんだ？」

「どうやらパチはこの話を知らなかったらしい。」

「だってパチのお母さんが…」

この話を持ちかけてきた、と言う前に僕にパチの右ストレートが決まっていた。

正直ものすごく痛い。パチはかなり強い。

「…痛い。」

「何で旅しなきゃいけないんだ！普通に暮らしたかったのに！！！」

この感じだともう一発喰らいそうなので早めに話を終わらせることにした。

「まあとりあえず旅の目標を決めようよ。どこに行くとか、何を手に入れるとか。」

もうほとんどパンチの体勢に入っていたパチはかなり不満そうな顔をした。

「……世界三大珍味を手に入れてこいと言われた。」

「そんなにお金ないと思うけど……」

「手に入れるまでは帰ってくるなと言われた。」

「一生帰れなかつたりして。」

「縁起でもないこと言うなよ!」

今度は左ストレートを喰らった。パチはきつとカルシウムが足りてない。両方のほほがヒリヒリする。

「まあまあとりあえず出発しようね。」

このまま話を続けていたら僕はボコボコにされるだろう。早く話を切り上げるのが得策だ。

「…道連れが欲しいな。」

パチは時々恐いことを言う。

「ここって田んぼしかないから一緒に旅に出たいって人はいっぱいいると思うよ。」

僕達が住んでる村には田んぼと家しかない。それ以外にはなににもない。

「いいじゃないか。平和で。」

パチは平和が好きな割にはよく手が出る。

「ん〜…じゃあ村の出口にいる地味なおじさんとか…」

「じゃそれで。」

道連れは誰でもいいみたい。僕達は村の出口に向かった。

村の出口に地味なおじさんがいる。

僕達は村を出るついでにそのおじさんを道連れ（パチが言うには）

にするよにしたら。

道連れというのはいいでにするものかな…？

第一話

俺はいつも村の出口にいる。あやしいやつが入って来ないように番をしているのだ。

しかし、こんな退屈な仕事は他にはないと思う。

「ん」

この仕事、辞めようかな。

「おん」

どうせあやしいやつなんて来ないし…

「おっさん！」

気付くと、二人組に話しかけられていた。一人はきりつとした眉に右目が青、左目が緑のかっこいいやつ。もう片方は金髪でまるい瞳の可愛い男つて感じのやつだ。こいつはなぜかほほが赤くはれていく。かなり痛そうだ。

「ああ、すまねえ、考え事してた。」

「俺はパチ。こっちがリイ。いきなりだが一緒に旅に出ないか？」

（本当にいきなりだ）かっこいい方はパチ、可愛い方はリイと言うらしい。

旅、か。なんでこの二人組が俺を選んだかわからんが、いいかもしれない。（もちろんこの仕事もう辞めようという気持ちもある。）

「・・・いいぜ。男同士で旅つても悪くない。」

俺がそう言ったとたん、急にパチが不機嫌になった。

「・・・違う。」

「…え？」

違つてどういふ意味だ？

「俺は女だ。」

・・・は？（数秒考えた）こんなかつこいいのに？服だって男物じゃないか。

「いや、そんな格好してるから...」

「こういう服しか似合わないんだ！だいたい可愛い服を着たり女言葉で喋ったりしたらキモイだのそんなことしても可愛くならないだの言われるし一体どうしろってんだ!？」

やばい。本人が一番気にしてることだったみたいだ。（でも逆ギレも少しあるような・・・）

「え〜僕は可愛いと思うけどなあ。」

リイがフオロー（だと思う。多分。）してくれたがパチにはまったく聞こえなかったらしい。

・・・とりあえず謝るところ！

という事を考えた矢先に頬に激痛がはしった。：殴られたみたいだ。頭がクラクラする。

「あ、大丈夫ですか？」

リイがのんびり言う。（見てないで助けるよ!!と思ったが声が出せなかった）

「これでも手加減したんだ。行くぞ。」

俺はこの旅に大きな不安を感じた。かといって一度言った事を変えるのはポリシーに反する。それはいやだ。

俺、大丈夫かなあ.....？

第二話

あああ。ぢごくだ。じごくではなくぢごくだ。間違えているわけではなく本当はじごくだがあえてぢごく。(ちよつとしたこだわり)

「おじさんどうしたの？元氣ないけど。」

リイが俺を心配してたずねてくる。

「ああ、大丈夫だ。」

と答える氣力もなかった。原因は村から他の街に行く唯一の交通手段が船であったことだ。船に乗ったはいいが…

かなり船酔いするタイプの俺としてはストレスで頭が禿げ上がりそうな思いだ。(実際にっぺんは少し禿げてるのを隠してる。もちろんトツプシークレットだ。)

「……こういうときは感覚を遮断するのが一番だよな。」

突然後ろからパチの声が聞こえた。

と思つたら、後頭部に激痛がはしり、俺は意識を失つた。

俺が意識を取り戻したとき、医務室のようなところにいた。

「あ、意識が戻つたんだ。あと十分程度で港につくよ。」

リイがこちらに来てそう言った。

どうせ氣絶するんだつたら、ギリギリまで氣絶していたい。少なくともあと十分程度は苦しむ。

「痛た…いくらなんでもやりすぎじゃないか？」

まだ後頭部がズキズキ痛む。

「まあ本人は反省してるみたいで、『やっぱり木刀は駄目だった』
って言ってたよ。」

木刀でやられたのか。よく生きてたな…

「もうそろそろ着くはずだから見てくるよ。」
リイはそう言って医務室から出て行った。

「うああああ!?!」

医務室の外から叫び声が聞こえた。その次の瞬間、船が大きく揺れて、そのときたまたま落ちてきたランプがたまたま後頭部を直撃し、俺はまた意識を失っていった。

ちゃんと生きてられるかな…

でも、少なくとも退屈ではないな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5036b/>

旅

2011年1月20日02時12分発行